

## 西川緑道公園の誕生—岡山市内用水の景観成立—

Construction of Nishigawa Green Road Park - The history of a canal in Okayama -

竹内 晋平\*\*、小野 芳朗\*\*\*

Shinpei TAKEUCHI and Yoshiro ONO

### ABSTRACT

Nishigawa Green Road Park (Park along a canal with tree planting) was constructed in 1976 by Okayama city. In this paper, the decision process of planning on the park was investigated through the archives such as the record of the Okayama municipal assembly in 1966 to 1976 and the record on the committee on the tree planting on Okayama. These archives shows that the function of Nishigawa river as irrigation system, fire prevention and so on from Edo era would be changed to parking area in motorization, urban drainage system after the construction of sewage treatment system and the urban tree planting plan to separate motorization and human walking. The final proposal to remove the car space from Green Park was denied from the citizen around the river and changed to the plan Green Road for human and the cars.

### 1. はじめに

本論文では、岡山市内の公園で西川の用水路両側に植樹して公園空間を造った「西川・枝川緑道公園」の成立過程を市会議事録と緑化問題特別委員会議事録を基に明らかにする。それは昭和49年から昭和57年(1974-1982)に整備された。2003年10月に緑道公園の活性化に取り組むグループ西川倶楽部により行われたアンケートには、夜の西川緑道公園に対して、「暗い」「怖い」という回答が目立ったという結果が出ている<sup>1)</sup>。また、車道によって緑道公園と周辺地域が分断されていることも大きな問題であり、新聞記事でも度々取り上げられている。事実、緑道公園内は昼夜とも両側道路の自動車騒音により、少なくとも快適な空間ではない。また雨天時は雨水を集めて流れは速く濁流である。さらに、これらの問題点を指摘した提言書が市民団体から市長に提出されてもいる<sup>2)</sup>。2006年に行った周辺住民への我々のアンケート結果<sup>3)</sup>によると、さびれたイメージ、危険なイメージを現在の公園に対して抱いている周辺住民も少なからずいる事がわかった。このようにいくつかの問題を抱えている緑道公園をどのように改良していくべきかの議論をおこすためにも本論でその造成プロセスを明らかにする意義があると考えられる。

### 2. 近世の西川空間

我々の研究事例<sup>4)</sup>では、近世を通して西川用水は城下町、下流農村地域に水を供給する幹線であり、元禄の(1688-1704)頃から城下の発展に伴い、枝線を発達させていった。しかし明治以降、路面電車路線網の発達、自動車の普及に伴う道路の拡張、上下水道網の発達により、これらの水路網は急速に姿を消していく。

\*Keywords: 岡山、西川用水、緑道公園

\*\*学士(環境理工学) 岡山大学大学院環境学研究所

\*\*\*正会員 博士(工学) 京都工芸繊維大学大学院  
工芸科学研究科造形工学部門

近世の用途の第一は農村地帯への灌漑用水機能と考えられる。その他にも防火用水や、水屋による飲用、高瀬船による輸送水路であった。生活排水の流入により、たびたび汚染された記録もある。しかし、明治38年(1905)の水道の完成と都市化の進行により、用水の機能は失われ生活排水や雨水の都市下水路となってゆく。昭和30年代には都市化による水質汚濁が顕著となっていた。

### 3. 岡崎平夫と下水道整備

西川の緑道公園化をリードしたのは、岡山市長岡崎平夫(1963-1983(昭和38から昭和58)年)である。岡崎は1930(昭和5)年8月に大阪市水道局に入庁し、1948(昭和23)年に吹田市水道部長に就任している<sup>5)</sup>。1950(昭和25)年1月に、当時厚生省公衆衛生局長であった三木行治(昭和26年~39年岡山県知事)に誘われ、同年6月、岡山市水道部長に転じている<sup>6)</sup>。1953(昭和28)年より、水道管理者兼水道局長として、給水能力の拡大、工業用水道の敷設、簡易水道の普及など多くの水道事業に取り組む。岡崎は赴任する際に三木から岡山の下水道建設を頼まれていた<sup>6)</sup>。そこで1951(昭和26)年に、水道局内に下水道係を創設し、下水道の調査・設計を指示し、下水道計画の策定に取り組んだ。1952(昭和27)年には東は旭川、南は旧国道2号線、北は三門~原尾島線の区域215ヘクタール、65,000人を対象とした計画を立て、建設・厚生両省の許可を得て同年2月、岡山市の公共下水道の天瀬ポンプ場の起工式を行った。1956(昭和31)年に、下水道課を新設し、初代課長に名古屋下水道処理場長の田中寛を招致し、拡張計画を立てる。この計画では、東は旭川、西は宇野線、北は山陽線、南は七日市・奥田の区域、578ヘクタール、190,000人を対象とした区域で、1963(昭和38)年1月19日、旭西浄化センターが第一次処理を開始した<sup>7)</sup>。このように岡崎平夫は1950(昭和25)年から1963(昭和38)年にかけて岡山市の下水道整備、水質浄化に積極

的に取り組んでいる。これは西川の水質浄化にも効果的で1971（昭和46）年9月29日の岡山市議会において、「まず第1にやはり水質汚濁を防止し、西川をきれいにする。これがためには下水をやるより手がないと。そういう下水道をやるために私は岡山市に実は赴任してまいったわけでございまして、20数年かかりまして市の中心部が一応でき上がりました」と述べている<sup>8)</sup>ことからわかる。そして1963（昭和38）年5月、岡崎は「光と水」「緑と花」をスローガンに掲げて岡山市長選に当選する。「緑と花」については1953（昭和28）年に、1905（明治38）年より配水池を内蔵する半田山に植物園（水道局管理→岡山市管理）を造成している（開園は1964（昭和39）年5月）。

「私は三十三年間、水とともに生きてきたので「水」をキャッチフレーズのひとつに使いたい、半田山植物園づくりで得た緑と花のある街づくりの理念もいれたい、と数人の人々と夜遅くまで議論して考えました。」と綴っている<sup>9)</sup>。ちなみに岡崎は1974（昭和49）年日本水道協会より分離した日本下水道協会の初代会長に就任している。

#### 4. 駐車場論争と水質

##### (1) 駐車場化の議論

水質汚濁を下水道整備により克服した西川用水をめぐることは、一方でモータリゼーションによる路上駐車や、都市化（大気汚染）をめぐるその用途の議論が起こっている。岡山市議会の議事録より、昭和40年（1965）頃から、西川を埋め立てて駐車場にすべきという意見が議員から多数出されている。これは当時西川は下水の流入はカットしたものの、ごみの不法投棄によって水質が悪く、また市中心部の構造がモータリゼーションの進行に追いついていないという当時の時代背景があった。この論争は1968（昭和43）年まで続く。

そのような意見に対して岡崎市長の答弁を議事録から引用すると、1965（昭和40）年2月においては、「西川の上に駐車場をつくるという点は、確かに傾聴に値する問題だ」としながらも、「西川こそは岡山市の唯一の魅力ある地帯」で「岡山市民、県民も誇っている地帯」と述べており、消極的な否定をしている<sup>10)</sup>。同年6月の定例会においても、市民から「いまはまだどぶ水かもしれないけれども、きれいな君（岡崎市長）は水を流す言うてるんだから、きれいな川があるという、しかもそれに柳があるということは何ともいえない岡山の魅力」という意見があることを理由に、「駐車場の問題は、ああした西川の美観をそこなわないように、いろんな方法を考えていきたい。」<sup>11)</sup>と述べ、ここでも明確な答弁を避けている。市議会における西川の駐車場化の意見に対する最後の答弁となる、1968（昭和43）年12月定例会においても、「川の上をですね利用せよということでございますが、まあ西川のあれは岡山のほんとうの魅力のポイントになっておりますので、あの上を利用することはまあ磯村議員等からも長年にわたってのサゼスチョンあるわけでございますけれども、これはなお考えさしていただきたい。問題がある、このように考えて

おるわけでございます。」と述べており、3年経過しても具体的な答えが出さず、議員から「それはもうあんた決断しなさい」と野次を飛ばされた<sup>12)</sup>。

##### (2) 水質保全

ここで、駐車場論争と関連して、西川の水質の時代変化について見ていきたい。近現代の西川の水質については、大きく3つの時代に分ける事ができる。まず、明治時代から本格的な下水道が通水を始めた1954（昭和29）年頃までである。明治末期、岡山市街の状況は下水の除去が不完全で、幾十条の下水道（排水路）があったが、そのほとんどは滞留していた。この時代の西川は排水が悪い上に市民が汚水を流し、寒中でも悪臭は鼻孔を刺激する程で、早朝の西川では、上流で肥びしゃくをあらってあり、その下流では衣類の洗濯、食器洗い、うがいをしている風景が見られた<sup>13)</sup>。また、1926（大正15）年7月22日の山陽新報（山陽新聞の前身）では「西川べりの夕涼み」という記事の中で、西川べりにいると、「物の怪のような異臭がぶんとくる」と書いている<sup>14)</sup>。

次に、昭和30、40年代である。この時代には、前述のように岡崎平夫氏の尽力により、1963（昭和38）年旭西浄化センターが第一次処理を開始している。また、同年政府が策定した下水道緊急整備5ヵ年計画を受けて、岡山市でも昭和38年度から42年度までの公共下水道事業に対し、17億3500万円を投じて下水道普及をはかっている<sup>15)</sup>。このような流れの中で、生活排水由来の西川の汚濁はなくなっていったと考えられる。しかし、1968（昭和43）年10月24日の山陽新聞の記事を見ると、「町をきれいに 一泣いている西川― 悪質化するゴミ投棄」と題し、「棒きれ、あき缶、ダンボールやビニール袋、ハッポースチロール等等があたり一杯にただよい、いやなニオイ、ゴミの収集車の転落現場ではない。ここは岡山市のど真ん中―市民のブルムナード、「西川」の素顔である。このゴミの出所は、家庭や商店。」<sup>16)</sup>とあり、尿尿や生活排水は流れなくなったものの、西川周辺の家庭、商店からのごみの不法投棄が問題となっていることが分かる。このことについては昭和40年代の岡山市議会においても度々議員から意見が挙げられている。

「用水路は悪水路になりまして、またごみ捨て場のような状態になっております。」（昭和41年9月定例会）<sup>17)</sup>

「西川のある川の問題、あのごみの山の問題については全く川でなしにごみの山といってもいいぐらいであります。」<sup>18)</sup>（昭和43年6月定例会）

3つめの時代として、昭和50年代から現代までの水質が改善された時代が挙げられる。この時代に水質が改善されたのは、西川流域美化運動協議会の影響が大きいと考えられる。同協議会は不法投棄が絶えない西川の現状を憂い、1969（昭和44）年、西川流域の地区住民によって結成された組織である。同協議会の清掃活動、環境美化の宣伝活動等の地道な活動により、1974（昭和49）年には鯉の放流<sup>19)</sup>、1976（昭和51）年には白鳥を放流<sup>20)</sup>出来る程市街中心部における西川の水質は良くなった。1980（昭和55）年2

月 28 日の山陽新聞では、「西川に溪流魚住みつく」の見出しで西川用水に溪流魚のアマゴやアユ、天然記念物のアユモドキが生息していることが伝えられている<sup>21)</sup>。

## 5. 岡山の緑化と西川緑道公園の誕生

西川緑道公園計画は、上記のように駐車場化への市長の抵抗と、下水道整備による浄化の結果をうけて始まる。そこには全国的な緑化推進の動きも関連したと考えられる。

1970(昭和45)年12月定例会において、吉藤実議員から、「西川を都市美保存として38万市民をはじめ近郷近県の名物の大公園にする意思はないか」という意見が出され、これに対し岡崎は、「すぐやりますとは交通の関係上申し上げられませんが、できるだけそういう方向で検討していきたいと思います。」と述べている<sup>22)</sup>。西川の緑道公園化について市議会で話が上がったのはこの時が初めてである。岡崎は、この時、当時の西川には戦後柳川(かつての岡山城外堀)から移植した柳が点在しており、用地を買収しなくて整備できる緑地が水と同居しているところは外には見当たらず、大改造すれば水と緑と花が一体となったすばらしい市民憩いの場ができ、都市景観も飛躍的に向上することを考えていた<sup>23)</sup>。

岡崎が西川の緑道公園化を強力に推し進めるに至った経緯は以下の3点と考えられる。

第一に、前述の市水道配水池を内蔵する半田山植物園づくりの経験がある。岡崎は昭和28年4月から半田山植物園の基礎造成に着手する<sup>24)</sup>。岡崎は、「親子の社会勉強の場にもなり、緑や花と親しみ、大切に作る気持ちも育ち、そのうえ市民の健全な憩いの場ともなり一石三鳥」「木や花は人間にとってかけがえのないもの、市民にゆとりと潤いのある生活をしていただくためには是非必要である」と述べている<sup>25)</sup>。この都市民と植物の接触が健全な憩いとなるという考え方のもとで推し進めた半田山植物園の完成をもって、岡崎は「緑と花のある街づくり」の理念<sup>26)</sup>の現実化・行政化を確信したと考えられる。

第2に、岡山市の観光資源としての西川緑道公園という視点である。それには1964-1966(昭和39から41)年の岡山城再建が関わってくる。この時期岡山城天守閣は、総事業費1億5000万円をかけて再建されるのであるが、再建の背景には、観光資源の確保があった。1972(昭和47)年に新大阪-岡山駅間に山陽新幹線が開通する。それに先立つ昭和40年2月定例会において、岡崎は岡山城再建の理由としては、古くから岡山に住んでいる人が岡山城の再建に郷愁を持っているということ挙げつつも、「私はそのような意味というよりか、むしろ(略)手っ取り早くこれは観光資源を開発して(略)特に東京から山陽新幹線が岡山までつきますという、従来非常に遠いと思っておった(略)人までどんどん新しい観光資源を求めてまいるだろうと思います。この場合に岡山県、特に岡山市は相当、観光資源に非常に開発すべき資源をたくさん持っているわけでございます。」<sup>27)</sup>と述べており、岡山城を観光資源

と考えていた事が分かる。しかし岡山城の経営は思わしくなく、昭和40年代後半の市議会においてそのことについて議員から度々言及を受けている。昭和40年代の岡山市政のこのような流れの中で、西川緑道公園を整備することによって、岡山に観光客を呼び込みたいという考え方があったのではないかと考えられる。後述の西川緑化に携わる緑化問題特別委員会においても、

「(西川緑道以外にも)有機的につながる緑道を東西に是非つくりたい」(1974(昭和49)年6月29日)<sup>28)</sup>

「西川を仕上げたら鳥城公園も県とタイアップして少し金をかけできるだけの整備をしてもらいたい。」(1975(昭和50)年1月27日)<sup>29)</sup>等の委員からの意見が見られる。

第3に、全国植樹祭との関連である。この全国植樹祭は毎年テーマが決められるが、テーマは概して1950-55(昭和25から30)年が荒廃地造林、1955-67(昭和30から昭和42)年が林種転換・拡大造林である。そして1967(昭和42)年4月9日岡山市開催の植樹祭において初めて「環境緑化」という言葉がテーマにつかわれることになる。そしてその後から、植樹祭のテーマに「環境」を冠するのが一般的になってくる<sup>30)</sup>。つまりこの時期は全国的に「緑化」が環境保全のツールとして使われ始める時期であると言える。1967(昭和42)年2月定例会において岡崎市長は「今度の植樹祭は、従来のいわゆる山間部の林業をどうというのでなしに、やはり都市緑化というのが相当のウエートを占めておるわけでございまして、(略)これを機会に大いに私は緑化問題を推進していこうと、非常に重点的に推進していくべきである。こういうことを考えております」と述べており<sup>31)</sup>、ここにも西川の緑道公園化の萌芽があると考えられる。

その後岡山市では、岡山市緑化条例が1971(昭和46)12月に議決、翌年1月に施行される。この時期、建設省(国土交通省)は、全国総合開発計画(1962)で目標とされた地域格差の是正を図るため、国策として工事の新規建設を促進していたが、工場の進出にあたっては、公害対策として、汚染源と人々を分離する目的で、工場の周囲や沿道に植樹する等の対策をとるようになった。そのような流れの中で、1972(昭和47)年には公共団体の所有する都市緑地を整備するための都市公園等整備緊急措置法、翌年には私有地の緑を確保するための都市緑地保全法を制定している<sup>32)</sup>。

岡山市緑化条例は岡崎氏のスローガン「光と水、緑と花」を推し進めていくために定めたものであるが、その内容は抽象的なものであり、強行規定は設けられていない。例として第3条を以下に挙げる。

「第3条 市民は、日常生活を緑にみちたうるおいあるものにするため、樹木、花等を植栽し、たいせつに育てるよう努めなければならない。」<sup>33)</sup>

このように抽象的なものであったため、実際に緑化事業を推進していくには新しい機関を設ける必要があった。その機関が、岡山市緑化推進本部(1972(昭和47)年1月設置)、

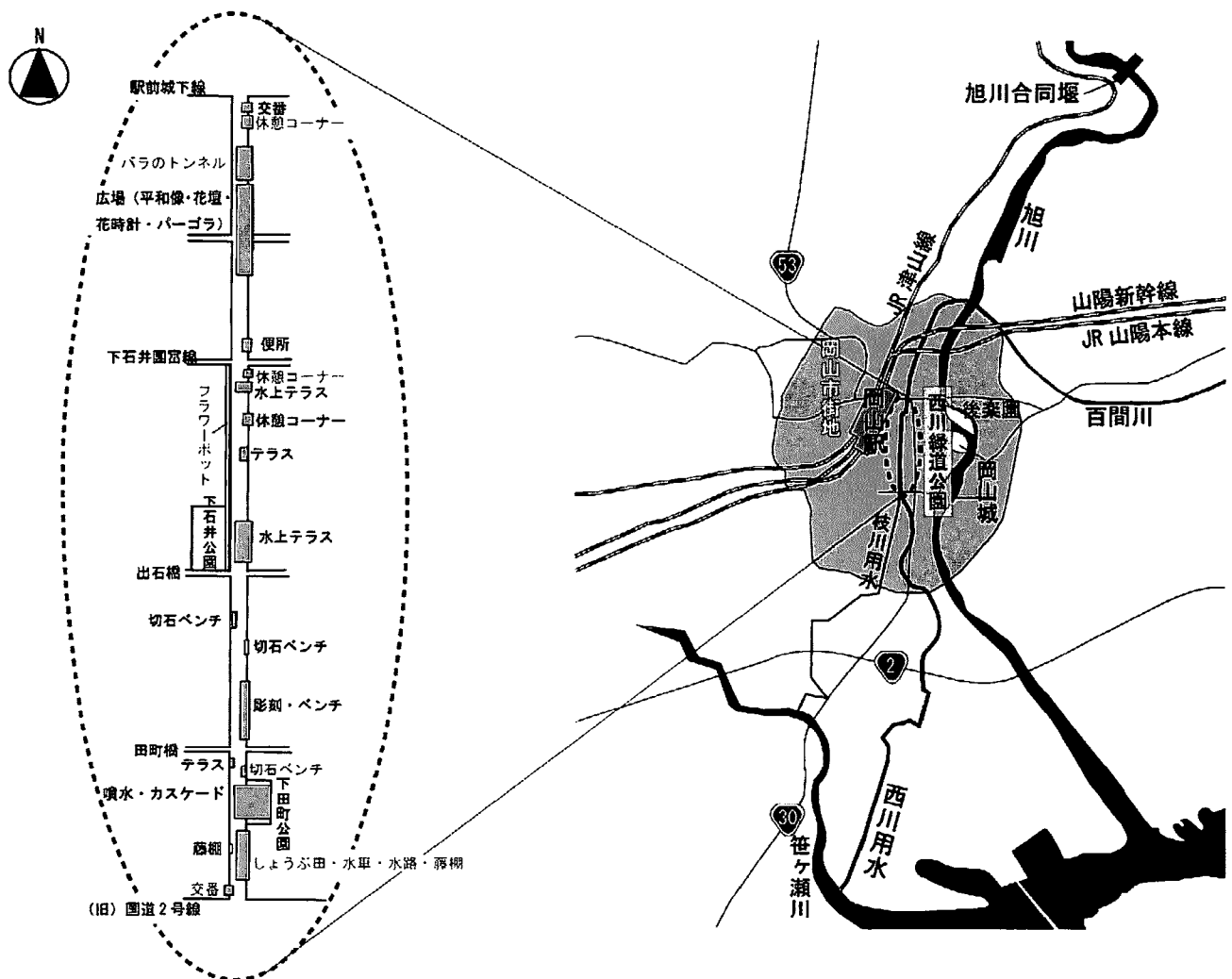


図-1 西川緑地計画概念図・岡山市街図

(図の左、薄い文字は現存しない施設)

岡山市緑化審議会（同年2月設置）、岡山市緑化問題特別委員会（1973（昭和48）年9月設置-1975（昭和50）年2月解散）である。また昭和48年4月には建設局に緑と花課を新設、上述審議会・推進本部の庶務にあたらせている<sup>34</sup>。それぞれの機関の役割を以下に示す。

まず、緑化審議会は諮問機関であり、市長の諮問に対し、緑化条例に基づいて実際に緑化を進めていくための計画を立てた。それが1972（昭和47）年12月に答申された岡山市緑化計画である。緑化推進本部は岡山市緑化計画に基づいて緑化を実行するにあたり、各関係部局の連絡調整をはかる機関である<sup>35</sup>。そのため、緑化審議会においては大学教授、画家、造園協会会長等専門色の強い委員が多いが、緑化推進本部の部員は企画局長、経済局長や観光課長、緑と花課長などであった<sup>36</sup>。緑化問題特別委員会は、審議会などの機関が実行している緑化政策に対して市議会議員の中から選出された委員（全8名）から意見を求めるための機関である。この機関の委員としては、岡山市で女性として初めて市議会議員を務めた戸田ハリエ<sup>37</sup>、前述の岡山市金山で行われた全国植樹祭（1967（昭和42）年4月9日）において、祭事に大きく関わった小河等隆<sup>38</sup>等が所属していた。委員長は議員の徳永八郎、これに岡山市側から説明

者として渡辺圭介緑化推進本部長（市理事）、企画局長、経済局長、教育次長、建設総務課長、緑と花課長が加わっていた。

緑化問題特別委員会の会議は、1973（昭和48）年9月29日-1975（昭和50）年2月22日までの間に全12回開催されている。その会議記録によれば緑化問題特別委員会において議題に上がった事項は、西川の緑道公園化以外にもいくつかあるが、西川の緑道公園化に関する事項が大半を占める。西川を緑道公園化するという計画は、前述の岡山市緑化計画の中で岡山市の緑化事業における拠点施策として鳥城公園、操山とともに大きく取り上げられている。この中で、「三門原尾島線から国道2号線までの西川線（約1,800m）を緑地帯として整備するため、（略）最終的には同地域の車両を全面乗入禁止（ただし、緊急用自動車道および東西線利用の横断自動車を除く）とする。」としており、1972（昭和47）年11月において審議会が描いた西川緑道公園のイメージは車両の進入が全くない歩行者専用道路を中心とした公園であることが分かる<sup>39</sup>。しかし、当時は前述のように西川を駐車場化すべきとの意見が市議会において提出されるほどにモータリゼーションの進行が激しかった時代である。当然西川周辺の商店主やガソリン

スタンドなどから猛反対を受ける事となる。会社、商店の経営が成り立たないと言うのである<sup>40)</sup>。全面緑地化の原案に反対して西川道路縮小計画反対協議会が周辺住民で結成される。

このような流れを受けて、長さ約 1800m に亘り全 35m の道幅を全て歩行者専用道路にする原案での計画実行が難しくなってくる。そして、1974 (昭和 49) 年 1 月、市長は反対協議会との話し合い、その中で、西川橋交番から旧国道 2 号線までの長さ約 1000m の道を両側の車道は残し、東側の車道 9m を 6m にして 3m を緑道に組み入れるという妥協案を提示する<sup>41)</sup>。このような妥協案を提示した理由として、国からの補助金を得る為になるべく迅速に住民の合意にこぎつけたかったことが挙げられる<sup>42)</sup>。

しかしこの妥協案に関し、現代言われているような「車道による分断」を緑道公園の決定的な問題点として挙げる者はいなかったのではあるか。実は 1973 (昭和 48) 年 11 月 20 日、第三回緑化問題特別委員会でそのような意見は出されている<sup>43)</sup>。

若林委員「(前略) 道路の両側で商売をしている人が、そのまま商売をやるとすれば、4m 位の道路ではむつかしくなる。(略) 緑化も今よりは良くなるが、魅力の点からいうとさほど魅力も持てないのではないか。(略) 将来思い切って車を止めてしまい、西川を歩く人を対象にした商売をやってもらったらどうか。(略) 現状をもとにしてやっていけば商売人の車の出入に不便になる。この程度の緑化ならそのマイナスは補えないと思う。」

渡辺理事「確かに妥協案は中途半端なものだ。旭川市(旭川平和通買物公園)の場合は 10 年かかって現在では地元からやってほしいという方向になってきている。(後略)」

しかし、このような意見は以後の緑化問題特別委員会では全く出されておらず、結局前述の妥協案で西川緑道公園計画は実行されることとなる。そして 1976 (昭和 51 年) 5 月、伊藤邦衛設計による西川緑道公園は完成する。図-1 が岡山市街図(参考:『都市と農業の共生 岡山西川用水』<sup>44)</sup>)、1974 (昭和 49) 年 4 月伊藤造園設計事務所作成の西川緑地計画概念図<sup>45)</sup>をトレースしたものである。



写真-1 西川緑道公園 (伊藤邦衛設計)

完成間もない時期の、「反対をされていて今更と思われるかもしれないが、上流にも是非つくってほしい。」という猛反対をしていた西川上流部住民の県政懇談会内における発言が契機となり、昭和 53 年度から 54 年度にかけて西川の支流枝川に、昭和 55 年度から 57 年度にかけて西川上流部にも緑道公園をつくり、合わせて 9 年の歳月をかけて長さ約 2.4km、面積 4ha の西川・枝川緑道公園は完成したのである<sup>46)</sup>。この緑道公園において当時から車道沿いに高さのある緑が植えられて、それが現在の緑道公園の暗さ、怖さに繋がっているが、それは車を遮蔽する目的であったと岡崎は語っている<sup>47)</sup>。

## 6. まとめ

西川は近世様々な用途で使われていたが、それらの利用法は減少し、それとともに水質の悪化も進行した。そして徐々に西川は岡山市民にとって利用可能な身近な川でなくなってゆく。そして、下水道事業により昭和 30 年代に西川を含めた市内河川の水質の浄化に努め、緑化事業に意欲的な岡崎平夫の目には西川が用地を買収する必要なく整備でき、しかも水と同居している緑地として魅力的に映った。その西川を緑道公園として整備しようと考えたのは自然であった。しかし、岡崎の意図であった車両全面立ち入り禁止の西川緑道公園計画は西川周辺住民の反対により阻まれることとなる。緑化問題特別委員会においても中途半端な西川緑道公園に対する批判は出たものの、その意見が実行に繋がることは全くなかった。

そして現代の西川緑道公園は西川周辺住民、商店主から「暗い」、「怖い」という意見や、車道による分断が問題点として挙げられている。しかしそうした空間構成を選んだのも当時の西川周辺住民、商店主自身であった。

### <謝辞>

西川の浄化や下水道整備の情報に関しては岡山市秘書課長友実武則氏(当時下水道局)の示唆を得た。また西川緑道公園に関する現状の議論に関しては坂本安輝子氏主宰の「西川塾」における経験が大きい。現状を認識し、未来を透視するためにその成立した歴史を実証しておくべきであるとの仕事に着手したのは、事実認識に疎い当の行政担当者との対話の中で生まれた。記して深甚の謝意を表す。

### 【参考文献】

- 1) 山陽新聞夕刊記事『西川物語<26>』山陽新聞社、2005 年 4 月 11 日、岡山市立図書館所蔵
- 2) 西川緑道公園 市民懇談会「“西川緑道公園”から始める人間的まちづくり」2007 年、岡山市立図書館所蔵
- 3) 柄尾恵梨子「生活景としてみた景観整備のあり方に関する研究 ～西川緑道公園を事例として～」岡山大学環境理工学部卒業論文、2007 年、小野芳朗指導
- 4) 小野芳朗・竹内晋平「水路都市岡山の近世—西川用水前史」土木史研究 28 巻、2008 年、pp.293-301
- 5) 大野慶子『都市水辺空間の再生』ミネルヴァ書房(株)、2004 年、p.254「岡崎平夫年表」の項中

- 6) 岡崎平夫『愚直人生らくがき帖』岡崎平夫出版、1991年、p.112-119「ダモイ・死線をこえて 桃太郎三木さんとの出会い」の項中
- 7) 大野慶子『都市水辺空間の再生』ミネルヴァ書房(株)、2004年、p.66-70「第3章 3 三木行治と岡山の出会い」の項中
- 8) 岡山市議会事務所『昭和46年9月定例 岡山市議会会議録』1971年、9月29日 p.154
- 9) 岡崎平夫『愚直人生らくがき帖』岡崎平夫出版、1991年、p.206「市長選マーチ 木で鼻(花)をくくる」の項中
- 10) 岡山市議会事務所『昭和40年2月定例 岡山市議会会議録』1965年、3月9日 p.213
- 11) 岡山市議会事務所『昭和40年6月定例 岡山市議会会議録』1965年、6月21日 p.71
- 12) 岡山市議会事務所『昭和43年12月定例 岡山市議会会議録』1968年、12月14日 p.149
- 13) 岡山市百年史編さん委員会『岡山市百年史(上)』、岡山市、1989年、pp.330-331「明治・大正・昭和(戦前)編 第三部 衛生と治安 第二章 保険と衛生 第一節 明治期の保健衛生 1 伝染病の流行 コレラの流行」の項中
- 14) 山陽新聞社『世相おかやま(昭和戦前明治大正編)』、山陽新聞社出版局、1990年、p.210「大正15年 西川ベリの夕涼み」、岡山大学附属図書館所蔵
- 15) 岡山市水道100年史編集委員会『岡山市水道百年史』岡山市水道局、2006年、p.673「第9編 関連する諸事業 第1章 下水道の建設 第2節 主な工事と施設 1 順調に工事進む」の項中
- 16) 高森幸夫『住民運動史西川流域』、西川流域美化運動協議会、1985年、pp.19-20「町をきれいに一泣いている西川—山陽新聞社報」、岡山県立図書館所蔵
- 17) 岡山市議会事務所『昭和41年9月定例 岡山市議会会議録』1966年、9月26日 p.245
- 18) 岡山市議会事務所『昭和43年6月定例 岡山市議会会議録』1968年、7月16日 p.189
- 19) 山陽新聞夕刊記事『西川物語<18>』山陽新聞社、2005年03月08日、岡山市立図書館所蔵
- 20) 高森幸夫『住民運動史西川流域』、西川流域美化運動協議会、1985年、p.221「第八回総会大会 白鳥放流する」、岡山県立図書館所蔵
- 21) 高森幸夫『住民運動史西川流域』、西川流域美化運動協議会、1985年、pp.247-248「第十二回総会大会 報告(5)」、岡山県立図書館所蔵
- 22) 岡山市議会事務所『昭和45年12月定例 岡山市議会会議録』1970年、12月18日 pp.287-289
- 23) 岡崎平夫『愚直人生らくがき帖』岡崎平夫出版、1991年、p.270「緑と花 光と水 西川緑道公園とリコール運動」の項中
- 24) 岡山市水道100年史編集委員会『岡山市水道百年史』岡山市水道局、2006年、p.693「第9編 関連する諸事業 第2章 半田山植物園 第3節 植物園の見直し 半田山植物園の歩み」の項中
- 25) 岡崎平夫『愚直人生らくがき帖』岡崎平夫出版、1991年、p.139,140「備前おかやま水商売 半田山植物園と街の植物博士」の項中
- 26) 同上書、p.206「市長選マーチ 木で鼻(花)をくくる」の項中
- 27) 岡山市議会事務所『昭和40年2月定例 岡山市議会会議録』1965年、3月8日 p.155
- 28) 昭和49年6月29日 緑化問題特別委員会会議記録(第7回) p.9、岡山市役所議会事務局議事課議事係所蔵
- 29) 昭和50年1月27日 緑化問題特別委員会会議記録(第11回) p.2、岡山市役所議会事務局議事課議事係所蔵
- 30) 国土緑化推進機構『国土緑化運動五十年史』国土緑化推進機構、2000年、巻末資料 p.18
- 31) 岡山市議会事務所『昭和42年2月定例 岡山市議会会議録』1967年、3月1日 p.77
- 32) 真田純子『都市の緑はどうあるべきか—東京緑地計画の考察から—』技報堂出版、2007年、p.4「序章 都市の緑」の項中、岡山県立図書館所蔵
- 33) 昭和48年9月29日 緑化問題特別委員会会議記録(第2回) 添付資料「岡山市緑化条例」p.4、岡山市役所議会事務局議事課議事係所蔵
- 34) 同上記録 添付資料「「緑と光のまち岡山」の推進について 4 推進の体制」p.4
- 35) 同上記録 添付資料「岡山市訓令甲第1号 岡山市緑化推進本部要綱」
- 36) 同上記録 添付資料「岡山市緑化推進本部員名簿」、「岡山市緑化審議会委員」
- 37) 山陽新聞朝刊記事『女そして自立は』山陽新聞社、1990年3月5日、岡山県立図書館所蔵
- 38) 小河等隆『ぬくもり』小河等隆出版、1988年、p.73,74「植樹祭」の項中
- 39) 昭和48年9月29日 緑化問題特別委員会会議記録(第2回) 添付資料「岡山市緑化計画答申 IV 拠点施策」pp.19-21、岡山市役所議会事務局議事課議事係所蔵
- 40) 昭和48年11月20日 緑化問題特別委員会会議記録(第3回) 添付資料 西川道路縮小反対協議会作成・反対チラシ、岡山市役所議会事務局議事課議事係所蔵
- 41) 昭和49年2月6日 緑化問題特別委員会会議記録(第4回) pp.1-2、岡山市役所議会事務局議事課議事係所蔵
- 42) 岡崎平夫『愚直人生らくがき帖』岡崎平夫出版、1991年、p.273「緑と花 光と水 西川緑道公園とリコール運動」の項中
- 43) 昭和48年11月20日 緑化問題特別委員会会議記録(第3回) pp.3-4、岡山市役所議会事務局議事課議事係所蔵
- 44) 岡山県土地改良事業団体連合会『都市と農業の共生 岡山西川用水』岡山県土地改良事業団体連合会、出版年不明、「西川用水の姿」の項
- 45) 昭和49年6月29日 緑化問題特別委員会会議記録(第7回) 添付資料「西川緑地の基本方針と具体策」(昭和49年4月 伊藤造園設計事務所作成) 中、岡山市役所議会事務局議事課議事係所蔵
- 46) 岡崎平夫『愚直人生らくがき帖』岡崎平夫出版、1991年、pp.275-276「緑と花 光と水 西川緑道公園とリコール運動」の項中
- 47) 同上書、p.275「緑と花 光と水 西川緑道公園とリコール運動」の項中